

歩行開始期の情動制御の個人差と気質および 親のパーソナリティ特性の関連性¹⁾

久崎 孝浩

The relation of temperaments and parental personality traits to emotion regulation patterns in toddlers

Takahiro HISAZAKI

本研究では、葛藤場面での子どもの情動や制御行動また母親の制御行動に子どもの気質や母親のパーソナリティ特性がいかに関連しているかを検討した。対象者は13～30ヶ月の子どものとその母親のペア28組であり、各ペアは玩具を片づけるという子どもに葛藤を引き起こす場面に参加した。また、母親には自分自身のパーソナリティ特性や子どもの気質に対する回答を求めた。分析の結果、気質的に活動性や快情動表出傾向の高い子どもほど自己慰撫を示しにくいこと、気質的に恐れやすい子どもほど積極的に対象物を求めようとしないことが明らかになった。また、外向性の高い母親ほど子どもの行動を契機にして子どもの注意を切り替える傾向があること、協調性の高い母親は洗練された説得をしない傾向にあることが示された。今後の研究として、子どもの制御パターンに対する子どもの気質や養育環境の交互作用に関する縦断的検討が望まれた。

キーワード：情動制御，歩行開始期，母子葛藤，気質，養育者のパーソナリティ

問 題

状況はともあれ、ある種の身体感覚とともに、特定の表出や行動または思考・判断へと個人を強く駆り立てるもの、それを心理学ではたいてい情動(emotion)と言う。理性や知性に相対するものとして扱われる恐れのある情動であるが、近年、個体の適応性や関係性・社会性の観点からその有意義なはたらきが論じられるようになってきた(Cosmides & Tooby, 2000; 遠藤, 2007; Evans, 2001; Keltner & Haidt, 2001)。すなわち、情動は、個体の生き残りや繁殖を保障し、他者を巻き込む形で関係を構築・維持し、集団内部での地位や適応を高めたり維持したりするということである。こうしたことは情動研究において前提視されつつあるが、しかし一方で例えば、怒りという情動が強く賦活することが繰り返されたり、沈黙化せずに長らく遷延したりすることになれば、その怒り

は個体の身体生理機能に悪影響を及ぼして自己破壊的性質を帯びることになるであろうし、他者との関係の維持や集団適応を妨げて関係破壊的なものになるであろう(遠藤, 2007)。それゆえ、怒りなどの不快情動をいかに制御・調整するかという問いに私たちは向き合わざるを得ないのである。

情動とそれを取り巻く文脈

情動へのアプローチには複数の立場がある(Averill, 1982; Campos, Campos, & Barrett, 1989; Izard & Malatesta, 1987; Sroufe, 1996)が、いずれにしても、情動の種類やその生起強度が文脈に依拠していることは間違いない(氏家, 2010)。情動は基本的に、個人がある状況に注意を向けそこに自分自身の目標と関連づけて捉えるというプロセスを経て生起する(Gross & Thompson, 2007)が、ここでいう文脈とは、この情動の生起プロセスに影響を及ぼす諸要素全般と言ってもよいかもしれない。情動の種類や強度は、個人の年齢や置かれている状況は無論のこと、情動の発動に直接影響を及ぼすであろう生得的な反応傾向た

¹⁾ 本論文の一部は、日本発達心理学会第18回大会(埼玉大学：2007年3月26日)にて発表された。

る気質、情動の発動プロセスの中核たる評価 (appraisal) の基盤となる知覚・認知の発達水準、養育者や大人との関係性とその歴史、そして個人を取り巻く集団・文化の規範や風土などによって変動しうるものと思われる。それゆえ氏家 (2010) が指摘しているように、情動発達研究では情動の文脈依存性に留意し、特定の情動に対する文脈効果を整理し見定めた上で情動現象の発達の変化を検討していく必要があるのだろう。

情動発達をこの文脈という観点で眺めたとき、特に文脈の様々な諸要素が交差して情動発達に顕著な変化を及ぼすという意味で歩行開始期 (toddlerhood) のそれは他の発達時期に比してかなり特異的であるかもしれない。歩行開始期という用語は本邦ではあまり馴染みがないが、欧米圏ではおよそ1歳過ぎから2歳終わり頃までの期間として一般に理解されている (Brownell & Kopp, 2007)。1歳を過ぎる頃から歩行が始まり、手指の操作が巧みになり、その他の運動機能も向上して、子どもはもっぱら養育者のもとを離れて自分自身を取り巻く環境への探索を活発に行うようになる。しかしそのような探索活動は危険を伴い、また養育者の意思や家庭内外の規範に反することも多いため、養育者から禁止・制止を結果的に引き出すようになる (Gralinski & Kopp, 1993)。また、1歳半頃に表象・記憶能力をベースとして自己の行為とその結果の関係に注意するようになると、自己自身の発動主体性 (agency) への強い認識が生まれてより積極的に環境探索を試みるであろうし、また、他者の目を意識して自己自身を捉えようとするスタンスももつようになって養育者に対して自己自身の欲求や意図を強く主張することも多くなるであろう。そうしたこともまた、養育者や大人の制止やしつけを引き出し、養育者や大人と子どもとの葛藤は顕著になっていくと考えられる。1歳過ぎには他者の意図や情動を理解しはじめることが実証されている (例えば、Meltzoff, 1995; Repacholi & Gopnik, 1997; Repacholi & Meltzof, 2007) にもかかわらず、歩行開始期の子どもは養育者の意図や情動に即した行動を一貫してとることができず反抗 (defiance) や自己主張 (self-assertion) が目立つからこそ、一部の社会認知発達の研究者たちはこの時期を

「謎めいた年代 (dark age: Meltzof, Gopnik, & Repacholi, 1999)」と呼ぶのであろう。しかし、情動発達という観点からみれば、多様な発達の要素が交錯しながらも養育者の禁止・制限に対する反抗や自己主張が一定してこの時期に増加することは、情動の他の文脈要素への依存性を超えた、この時期のどの子どもにも一貫してみられる発達現象だと考えられる。また、それを情動の種類に限定してみれば怒り喚起とその調整の発達として理解することができる。そして、養育者と子どもの間で生じる葛藤、あるいは怒りやそれに類する不快情動をめぐるやりとりという状況は、日々のその展開のあり方がその後の子どもの発動主体性や自己効力感、またある場合には自己破壊的・関係破壊的となりうる怒りの経験とそれを適切に扱う方法の獲得というところにも影響を及ぼす可能性があるという意味で、検討に値するものでもある (詳細は坂上 (2010) を参照されたい)。

そこで本研究では、発達という文脈の観点から歩行開始期である生後1~2歳に焦点を当て、状況という文脈の観点から養育者と子どもとの間の葛藤的やりとりに着目したい。

情動制御の発達

怒りやそれに類する不快情動をいかに調整・制御しうるかということについて、歩行開始期は様々な意味でその過渡期として注目されてきた。情動調整あるいは情動制御 (emotion regulation) は一般に、喚起した情動の主観的経験 (感情価、強度、持続時間など) や表出を調整・管理することと定義される (Cole, Martin, & Dennis, 2004; Eisenberg & Spinrad, 2004; Saarni, 1999; Thompson, 1990)。先でも述べたように、情動は適応価を有しているものの、場合によっては自己破壊的・関係破壊的ともなり得、情動制御は心理的適応あるいは精神的健康をもたらす情動的コンピテンス (emotional competence: Saarni, Campos, Camras, & Witherington, 2006) の主要な要素の1つである。そして、とりわけ歩行開始期は、その情動制御のパターンや方略が急速に変容していく時期として注目されているのである。例えば、Kopp (1989) によれば、生後1年目の終わり頃から、予期能力や手段・目的関係の理解といった認知能力や移動運動能力の発達に

伴って情動制御方略のレパートリーが増大し、生後2、3年目になると、表象能力や想起記憶の発達を基盤として新たに自己意識や苦痛の原因の理解が可能となり、苦痛そのものを操作するためにある特定の活動を持続したり、苦痛の原因となっている状況を変化させるために計画性のある行動を示したりするようになって情動制御方略はより状況に見合うものになっていくという。また、坂上（1999）は18ヶ月児と24ヶ月児のマイルドなフラストレーション状況での観察から、生後18～24ヶ月という期間が、情動制御のパターンや方略が養育者による二者間制御から自己制御へ、また情動焦点的な方略から問題焦点的な方略へと変容する過渡期であることを示唆している。しかし実質的に、いかなる制御方略が情動を調整し、有効なものとして発達するのか、その制御効果や発達プロセスが審らかになっているわけでない。Bridges, Denham, & Ganiban（2004）は乳幼児・児童期の情動制御発達研究について幾つかの概念・方法論上の問題を指摘しているが、上記にかかわるものとして、（1）ある発達の段階でいかなる行動が制御効果をもたらすか（あるいは、持たないか）、（2）ある種の制御行動は情動に対して即時的な制御効果というよりも長期的な制御効果をなすというわけではないか、（3）情動制御レパートリーの変化はそのレパートリー内の制御行動それぞれの相対的な効果の影響をどの程度受けるか、（4）ある特定の行動が情動制御レパートリーとして存続したり、そこから消滅したりすることに身体発達や認知発達がいかに関与するか、（5）子どもを取り巻く特定の環境のなかで効果のあるもの（あるいは効果のないもの）として認められる制御行動は情動制御レパートリーに取り入れられて存続する（あるいはレパートリーから消滅する）か、という重要な問いを発している。

（1）の問いに対しては、現在までに幾らかそれにこたえる知見が示されてきている（Buss & Goldsmith, 1998; Diener & Mangelsdorf, 1999; 久崎, 2008; Gilliom, Shaw, Beck, Schonberg, & Lukon, 2002）が、子どもや養育者のいかなる行動が不快情動を即時的に沈静させるかについて未だ一貫した示唆は得られておらず、更なる検討が

待たれるところである。（2）の問いに対する答えを示唆する知見も筆者の知る限りまだ見当たらない。がしかし、長期漸次的な制御効果に関する考えがないわけではない。子ども自身の制御行動でなく養育者側の行動に関するものであるが、例えば、Fonagy, Gergely, Jurist, & Target（2002）は、養育者と乳幼児のやりとりで断続的に見られる養育者の情動の映し出し（affective mirroring）が最終的に子どもの不快情動表出の頻度や強度を低減させ、情動を自己制御する主体としての自己感覚を培うとして、その効果や発達の意義を指摘している。情動の映し出しとは、養育者が子どもの情動状態をそのまま写し取って返すというものではなく、それを自他の区別がつくよう誇張・調整された表情や声を通してフィードバックするという養育者のはたらきかけであり、養育者が自ら子どもの情動状態に巻き込まれてしまうというのではない。一方、子どもは生まれながらにして随伴性探知モジュール（contingency detection module）を備えており、それを通じて自己の不快な情動状態とそれに対する養育者の情動的映し出しの随伴性をモニターし、やりとりの中で展開される養育者の映し出しが適度なものであれば自己の不快な情動状態や表出を減退させていくという¹。ただ、こうしたことは未だ推論の域を出ないものであり、今後検討していかなければならない。

（1）や（2）の問いのところでみたように、子どもや養育者のいかなる行動が子どもの不快情動を制御するのか、その実質的な効果について現段階では十分に検討されていないというのが情動制御発達研究の実状である。それゆえ、（3）の問いへの答えを示唆する研究を見出すことは難しいであろう。これらに対して、（4）と（5）の問いは、情動制御行動のパターンの個人差がいかに生まれるかに関するものである。（4）について、特に歩行開始期における養育者と子どもの葛藤あるいは子どもに不快情動を喚起させる状況での制御方略の獲得や減衰に、身体発達や認知発達がいかに関与するかについて直接検討したものは殆どないが、坂上（2010）の論は参考になるかもしれない。歩行開始期の間は、養育者の介入に対して反抗や泣き・癩癩といった怒りを伴う未熟な

不従順行動 (noncompliance) が減退し、自己主張や交渉といった洗練された不従順行動が増大する (Kuczynski & Kochanska, 1990) が、坂上 (2010) はそうした子どもの不従順行動の質的変化の理由として、言語理解や因果関係の理解また自他分化に伴う認知的評価の変容、言語コミュニケーションの発達に伴う要求表現のスキル化、記憶能力や推論能力また実行機能の発達に伴う制御方略選択の柔軟性を挙げて推察している。ただ、特定の身体機能・認知能力を直接把握して情動制御行動の獲得・減退への影響を検討している研究は筆者の知る限り皆無であり、これもまた今後検討すべき課題であろう。

しかし、(5) について、乳幼児期の子どもの不快情動や制御方略に対する養育環境や養育行動の関連性や予測的関係を検討したものは多々在る (例えば、Calkins & Johnson, 1998; Grolnick, Kurowski, McMenamy, Rivkin, & Bridges, 1998; 金丸・無藤, 2004; Spinrad, Stifter, Donelan-McCall, & Turner, 2004)。情動制御の個人差には部分的に気質 (temperament) が関与していると考えられる (Rothbart & Bates, 1998) が、それ以上に養育環境や養育行動の影響に注目が集まるのは、その多くが、歩行開始期にわたる情動の自己制御の萌芽およびそのパターンの獲得が実は養育者による制御行動に支えられていると暗にみているからなのである。

情動制御の個人差と養育環境

歩行開始期の子どもの不快情動制御と養育者の制御行動の関連については、例えば、Calkins & Johnson (1998) が、子どもの欲求不満事態に対して先回りの対応をしがちな母親の子どもは欲求不満事態に対して不快情動を示しやすいこと、子どもに正のフィードバックや説明をする傾向の高い母親の子どもは欲求不満事態に対して気晴らしや建設的な対処をする傾向にあることを示している。また、Grolnick et al. (1998) は、子どもの欲求不満事態に積極的に関わったり気晴らしをしたりする傾向のある母親の子どもは、一人で欲求不満事態にのぞんだとき不快情動を示しやすいことを明らかにしている。ただ、養育者の制御行動の影響についてはまだ一貫した知見がなく、日頃のいかなる養育者の制御行動がその後の子ども

の不快情動の制御方略パターンと結びついているのか縦断的な検討が必要であろう。

また、養育者と子どもとの情動的やりとりの経験が子どもに養育者の利用可能性への期待をもたらし、ひいてはそれが不快情動制御において養育者以外の外的資源を求めることにつながる (Calkins & Hill, 2007) のだとすれば、養育者との特定の愛着関係が子どもの不快情動の制御パターンに一定の影響を及ぼすということも考えられよう。Diener, Mangelsdorf, McHale, & Frosch (2002) は両親に対して安定型愛着の子どもが、不快情動を招く事態に一人に対応するときに両親を意識した制御方略を示しやすいことを明らかにしている。また、Gilliom et al. (2002) は、乳児期の安定した愛着が欲求不満事態に一人で臨むときの注意転換行動 (不快情動を抑制する建設的な自己制御方略) を予期することを示している。こうした知見は、安定した養育者との愛着関係が自律的な情動制御における効果的な方略の発達を方向づける可能性を示唆している。そして、実のところ、先で記した Fonagy et al. (2002) の論は安定した愛着関係の構築・維持を、養育者側の情動的映し出しおよび子ども側の随伴性探知モジュールという機能に見出そうとするものであった。やりとりの中で見られる養育者による適度に断続的な情動的映し出しが、安定した愛着関係だけでなく子どもに自ら情動制御する主体としての感覚、そして最終的に自律的な情動制御の能力をもたらすという発想が、Fonagy et al. (2002) の論の中に在るのである。

ただ、こうして知見を列記したものの、養育環境の影響について体系的な理解が得られているわけではない。すなわち、養育行動や愛着関係以外にいかなる環境要因が子どもの不快情動制御の発達に関係しているか、また、そうした関係を媒介したり調整したりするプロセス (mediational and moderational process) があるか、そして、その関係は実際に養育者から子どもへだけでなく子どもから養育者への影響も含めたいかなるトランザクション関係 (transactional relationship) なのか、ということまで審かかになっていないのである (Calkins & Hill, 2007)。

情動制御の個人差と気質

一方、情動の安定した生得的個性とも言う気質 (Goldsmith, 1996) の情動制御への関与については幾らか研究があり、Mangelsdorf, Shapiro, & Marzolf (1995) は気質的に恐れやすい子どもは自己慰撫が多く気晴らし行動が少ないこと、Nachmias, Gunner, Mangelsdorf, Parriz, & Buss (1996) は抑制的な子どもは母親に慰撫を求めやすいことを明らかにしている。また、Calkins & Johnson (1998) は、気質的に怒りやすい子どもは攻撃的行動が多く、問題焦点の対処行動や気晴らし行動が少ないことを示している。こうしてみると、気質的な恐れやすさは情動制御方略として慰撫的行動を導きやすく、気質的な怒りやすさは情動制御における混乱を導きやすいのかもしれない。Calkins & Johnson (1998) によれば、気質は情動の発達の分化に伴い情動制御に対して情動種で異なる影響を及ぼすようになるというが、先で記した恐れや怒りといった情動種以外の気質的要素においても情動制御方略と幾らか関連が見られるかもしれない。

本研究の内容

ここまで、歩行開始期における不快情動の制御の発達について研究動向を概観してみた。特に本研究では養育環境の影響の体系的な理解に一抹の示唆を与えるものとして、歩行開始期の子どもと養育者の葛藤的やりとりにおける子どもの情動や制御行動および養育者の制御行動の生起に対して、時間的に安定した子どもの気質や養育者のパーソナリティ特性が背景的にいかに影響するかを探索的に検討することを試みる。なお本研究では、久崎 (2008) で発表した研究の際に得られた実験観察データ、および保護者から回答を得た保護者自身のパーソナリティ特性と子どもの気質に関するデータを使用して検討をする。

方 法

調査対象

熊本県内に在住の生後1歳1ヶ月から2歳6ヶ月の子ども (平均月齢21.8ヶ月, 男児18名, 女児10名) とその母親 (平均年齢31.7歳, レンジ24-40歳) の28組の母子を対象とした。久崎 (2008) にも示しているように、対象母子は筆者の知人や

さらにその知人の紹介を通じて調査への協力を得て、調査は対象者宅かその近隣の公共施設を借りて行われた。調査前に書面を通じて対象者に対し、調査の趣旨や手続き、実験観察が子どもに多少不快な思いをもたらす可能性があること、観察中に子どもの激しい泣き・痙攣が生じそうになった場合には中断することなどを伝え、その了解を得ることのできた母子の観察調査および質問紙調査を実施した。

実験観察の手続き

観察場面：観察の対象となるのは、子どもが馴染みのある玩具で遊んでいる途中で母親に玩具を子どもの目の届かないところに片づけるという状況での母子の葛藤的なやりとりである。以下のような一連の3つの場面を設定して、全ての場면을観察・録画した。

①自由遊び場面A：調査者が用意した4種類の玩具で母子ともに遊んでもらい、子どもがその4種類の玩具のいずれかを好んで落ち着いて遊ぶまで、この場面は続いた。

②片づけ場面 (3分間)：調査者は子どもが4種類の玩具のいずれかで落ち着いて遊んでいるのを確認して、母親に片付けるよう合図を送った。母親は子どもに向かって「お片づけの時間だから、玩具片づけようね」といって調査者が用意した全ての玩具をなるべく早くビニール袋に入れて、それを子どもの手の届かないところに置いた。その後は場面が終了するまで、母親には自由に子どもの相手をしてもらうよう要請した。

③自由遊び場面B：母親は片づけた玩具をビニール袋から取り出して、子どもには再び母親と一緒にその玩具で自由に遊んでもらった。この場面は、子どもの不快情動を回復させる目的があるため10分程度の時間を設定した。

情動・行動評定：片づけ場面は子どもの情動変化や制御行動また母親の制御行動が多頻度で多様に見られると考えられ、片づけ場面における子どもの情動状態、子どもの情動制御と見込まれる行動、母親による情動制御と見込まれる行動を評定した。その評定のために、以下のような尺度や行動コードを用意した。これら情動・行動の評定では、分析場面約3分間を10秒毎に区切り、それを1単位とするタイムサンプリング法で行った。ど

の子どもも3分間観察されたため、どの子どもの観察単位数も18であった。

①子どもの情動状態：子どもの快および不快情動の状態を Hedonic Tone Scale (Easterbrooks & Emde, 1983) で評定した。この尺度は表情や発声の強度に基づいて全体的な情動状態を評定するために使用した。快情動の場合は1単位 (10秒間) 毎に「0. なし」, 「1. 関心」, 「2. ほほえむ」, 「3. 笑い」のいずれかに評定され、また不快情動の場合は1単位 (10秒間) 毎に「0. なし」, 「1. 眉をひそめる・抵抗する」, 「2. むずかり」, 「3. 明らかな不快」のいずれかに評定された (Table 1 参照)。また、快情動と不快情動が同時に並存することはないと考えられ、それぞれ独立かつ相互排他的に評定をした。すなわち、1単位中で快から不快情動へ、あるいは不快から快情動へと変化した場合には、1単位中でどちらが時間的に占めていたかという観点から快・不快のいずれかについてのみ評定した。ランダムに選んだ7組の母子

について筆者と女性観察者以外の心理系大学院生が評定して評定者間一致率を求めたところ、快情動 $\kappa = .82$ 、不快情動 $\kappa = .79$ であった。

②子どもの制御と見込まれる行動：子どもの情動状態とは独立に、特に不快情動を制御すると思われる行動を評定するために、Grolnick ら (Grolnick, Bridges, & Conell, 1996; Grolnick et al., 1998; Grolnick, Kurowski, & McMenamy, 1999) や金丸・無藤 (2004) を参考にその行動カテゴリーを作成し、久崎 (2008) で使用したのと同じものを使用した (Table 2 参照)。行動評定は、子どもの情動状態と同様に10秒間を1単位とし、各行動カテゴリーについて1単位中で行動が生じたか否かを評定した。また、1単位中に2つ以上のカテゴリーが同時あるいは連続的に生起する場合には、いずれかのカテゴリーを優先的に選択することはせず、生じた行動カテゴリーすべてを評定した。ランダムに選んだ7組の母子について筆者と女性観察者以外の心理系大学院生

Table 1 子どもの情動カテゴリー

分類	カテゴリー	定義
不快情動	0. なし	下記のことがない (hedonic トーンは、ポジティブまたはニュートラル)。不快によって眉をしかめるというのではなく、他のことで眉をしかめるということもあるかもしれない。まじめくさった顔、あるいは短いネガティブな口調を伴うニュートラルな表情の場合もある。
	1. 眉をひそめる ／抵抗する	口を尖らせる、泣き出す前の顔、不快によって眉をひそめる、短くネガティブな声を出す。(例えば、うなるように言ったり、反抗したり、フラストレーションを示す声など—これらは短く、キーキーというトーンや緊張感を伴うことが多い—)
	2. むずかり	べそをかく、またはむずかり。そのどちらにしても、1回だけのむずかり声ではなく、一続きのむずかり声を伴う。
	3. 明らかな不快	顔と声に明らかな不快が表れている。例えば顔をくしゃくしゃにする、目を閉じる、涙が出る、などの表情を伴うような全開の泣きである。
快情動	0. なし	下記のことが見られない。(情動状態がネガティブかあるいは中立である)
	1. 関心	体全体の動きは伴わず (例：目の動きがない、あるいは近づかない)、移ろいやすい笑いである。または、あたたかい微笑みや楽しそうな声を伴わずに、体の動きに興奮が見られる。あるいはポジティブな興味や集中を示す。
	2. ほほえむ	目の動き (目が輝くなど) や楽しそうな声を伴う、あたたかい笑いがある。しかし、笑い声やかん高い声はない。
	3. 笑い	笑い声や楽しそうな声 (例：楽しそうにのどを鳴らす、あるいは金きり声を上げる) を伴う、生き生きとした笑いがある。

Table 2 子どもの行動カテゴリー

分類	子どもの行動	
	カテゴリー	定義
対象への注意維持	対象への焦点化 (受動的)	4種の玩具や玩具を入れた袋に触ることなく、泣いたりむずがったりする、それらを注視したり指差したりする。
	対象への焦点化 (能動的)	4種の玩具や玩具を入れた袋に触れて声を出したり引っ張ったりするなど、直接働きかける。
	対象への焦点化 (言語随伴的)	言葉を通して4種の玩具で遊ぶことを要求したり、片づけを拒否したりする。
対象からの注意解放	気晴らし (受動的)	4種の玩具や袋以外の物を見たり、指差したり、指で触れたりするが、積極的にその対象物で遊んだり働きかけたりはしない。また、周囲を探索して歩き回る。
	気晴らし (能動的)	4種の玩具や袋以外の物に集中して遊ぶ (誰と遊ぶか、また遊び方は問わない)。
慰撫	母親への慰撫要求	抱っこを要求したり、母親の身体の一部や衣服に触れたり、母親の膝に寄りかかったりするなど、慰撫を要求する。
	自己慰撫	自分自身の身体の一部や衣服に触る。
その他	母親への攻撃行動	たたく、嘔む、つねるなどの攻撃的な行動を示したり、言葉で攻撃したりする。
	その他	部屋を出る行動、評定不可能な行動を示す。

Table 3 母親の行動カテゴリー

分類	母親の行動	
	カテゴリー	定義
対象への注意維持	単純な説得	「ダメ」などの単純な言葉の表現で説明したり禁止したり、あるいは片づけを促したりする。
	洗練された説得	片づけなければならない理由を説明したり、子どもが受け入れやすい方法で片づけを指示したりする。
対象からの注意解放	注意切り替え (母親始発)	4種の玩具や袋から子どもの注意をそらすために、母親が別の物に指差したり、それを提示したり、他の遊びを提案したりする。また、提案した他の遊びを子どもと一緒にする。
	注意切り替え (子ども始発)	子どもから始めた他の遊び (4種の玩具や袋以外の物での遊び、手遊びなど) を一緒にする。
慰撫	身体的慰撫 (子ども始発)	子どもの求めに応じて母親が行うもので、子どもの身体の一部や衣服に触れて慰撫する。
	身体的慰撫 (母親始発)	母親が先行して、子どもの身体の一部や衣服に触れて慰撫する。
	受容	子どもの気持ちや行動を汲み取って、それを言葉にしたり、問いかけたりする。また、子どもの言っている言葉をそのまま返したり、うなづいたりする。
その他	消極的な関わり	特に何もしなかったり、片づけや子どもの情動制御に関連しない行動を示したりする。
	微笑み	頬の筋肉や口角が上がる。

が評定し、各行動カテゴリーについて評定者間一致率を求めたところ、 $\kappa = .75 \sim .92$ であった。

③母親による制御と見込まれる行動：Grolnick et al. (1998) や金丸・無藤 (2004) は先の子どもの行動カテゴリーに対応する形で、対象への焦点化、子どもの注意の解放、子どもへの慰撫という観点から母親の行動をカテゴリー化しており、子どもと母親の相互作用を把握しやすいように設定している。そこで先と同様に、Grolnick et al. (1998) や金丸・無藤 (2004) の研究を参考にして、母親が子どもの情動を制御していると思われる行動をカテゴリー化した (Table 3 参照)。これも、久崎 (2008) で使用したものと同一である。実際の評定の手続きは、子どもの情動制御と見込まれる行動と同様である。ランダムに選んだ7組の母子について筆者と女性観察者以外の心理系大学院生が評定し、各行動カテゴリーについて評定者間一致率を求めたところ、 $\kappa = .78 \sim .90$ であった。

質問紙調査の手続き

質問紙は実験観察終了後に母親に配布し、郵送するよう要請して回収した。質問紙は、子どもの気質に関する尺度と母親のパーソナリティ特性を測定する尺度で構成されている。

子どもの気質に関する尺度：子どもの気質については Goldsmith (1992) の開発した乳幼児行動評定質問紙 Toddler Behavior Assessment Questionnaire (以下、TBAQ と略する) を用いた。TBAQ の項目は全部で111項目あり、「活動性」、「快の情動表出」、「恐れやすさ」、「興味・固執」、「怒りやすさ」、「社会的望ましさ」の7次元で構成されている。Kusanagi, Hoshi, & Chen (1997) によって日本語に翻訳されて信頼性・妥当性が検討され、日本人サンプルにおいても高い

信頼性・妥当性を得ている。しかし日本語版にされた TBAQ 項目の紹介がなかったため、Kusanagi et al. (1997) の日本語版化の手続きを参考にして筆者が各項目を日本語に訳して改めて日本語版 TBAQ として尺度を作成した。それらの項目得点を Goldsmith (1992) が提唱する7次元に分けて合計平均して各次元を得点化したデータを分析では使用した。各項目は子どもの行動を表すもので、それが最近1ヶ月以内にどの程度観察されたかという問いに対して母親が7件法(「全くなかった」～「いつもあった」)で回答した。子どもが質問紙項目にあるような経験をしていない場合には、「どれにも当てはまらない」を選択して回答してもらった。

母親のパーソナリティ特性に関する尺度：和田 (1996) の開発した Big Five 尺度を用いた。Big Five 尺度は60項目あり、「情緒不安定性 (neuroticism)」、「外向性 (extraversion)」、「(経験への) 開放性 (openness to experience)」、「調和性 (agreeableness)」、「誠実性 (conscientiousness)」の5次元で構成される。項目得点を各次元で合計平均して5次元それぞれの得点を算出したデータを分析では使用した。各項目はパーソナリティ特性を反映する形容詞や形容動詞で表記され、それに自分自身がどの程度当てはまるかを問うものであり、母親自身が7件法(「全く当てはまらない」～「非常に当てはまる」)で回答した。

分析方法・統計処理

まず、子どもの情動や制御行動が加齢に応じていかに変化するのかを見ておくために、子どもの月齢と子どもの情動や制御行動の関連を単純相関係数によって検討する (Figure1の①)。また、子ども月齢に応じて母親の特定の制御行動が減退し

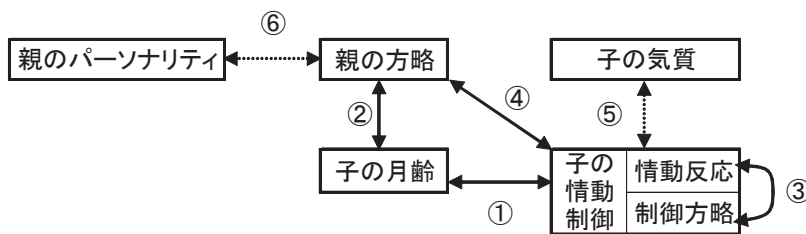


Figure 1 相関分析の概略図

たりパターン化したりする可能性があるため、それを検討する目的として、子どもの月齢と母親の制御行動の単純相関係数を算出する (Figure 1 の②)。続いて、葛藤的やりとりの中で、子どもの特定の情動反応の多さによって子ども自身の制御行動が引き出される、あるいは子どもの制御行動によって特定の情動反応が抑制して減退する可能性を検討する目的として、子ども情動と制御行動の関係 (月齢の影響を受ける可能性があると思われるが、子どもの快・不快情動によって子どもの制御行動がいかに変動するかを純粋に理解するために) 単純相関係数で検討する (Figure 1 の③)。さらに、子どもの特定の情動反応によって母親による制御行動が引き出される、あるいは母親の制御行動によって子どもの特定の情動反応が抑制されて減退する可能性を検討する目的として、子どもの情動と母親の制御行動の (月齢の影響を受ける可能性があると思われるが、子どもの快・不快情動によって子どもの制御行動がいかに変動するかを純粋に理解するために) 単純相関係数を算出する (Figure 1 の④)。なお、子どもの

制御行動と母親の制御行動の関係については相関係数マトリックスが大きくなって解釈が困難になる可能性が考えられ、相関係数の算出を行わなかった (ただ、子どもの対象への焦点化 (執着行動) が母親のいかなる行動によって沈静あるいは増大するかについては久崎 (2008) で検討しているので、それを参照されたい)。そして最終的に、子どもの情動や制御行動に子ども自身の気質がいかに関与しているかを検討するために、子どもの情動・制御行動と気質の (子どもの情動や制御行動は月齢の影響を受ける可能性があるため、月齢を統制した) 偏相関係数を算出する (Figure 1 の⑤)。また、母親による制御行動が母親自身のパーソナリティ特性といかに関連するかを検討するために、母親の制御行動とパーソナリティ特性の (母親の制御行動が子どもの月齢や情動反応に影響を受ける可能性があるため、子どもの月齢と情動を統制した) 偏相関係数を算出する (Figure 1 の⑥)。

Table 4 子どもの情動の平均および子どもと母親の行動の生起頻度の平均

子どもの情動および行動		Mean (SD)	母親の行動	Mean (SD)
情動	快情動	1.44 (1.02)		
	不快情動	1.08 (1.28)		
対象への注意維持	対象への焦点化 (受動的)	1.89 (2.01)	単純な説得	6.54 (6.23)
	対象への焦点化 (能動的)	9.82 (5.60)	洗練された説得	4.93 (5.29)
	対象への焦点化 (言語随伴的)	2.54 (4.68)		
対象からの注意解放	気晴らし (受動的)	1.43 (2.85)	注意切り替え (母親始発)	.64 (1.73)
	気晴らし (能動的)	.61 (1.99)	注意切り替え (子ども始発)	.25 (.84)
慰撫	母親への慰撫要求	1.68 (2.75)	身体的慰撫 (子ども始発)	1.04 (1.90)
	自己慰撫	.71 (2.00)	身体的慰撫 (母親始発)	.57 (1.14)
			受容	2.71 (3.02)
その他	母親への攻撃的行動	.21 (.42)	消極的な関わり	.14 (.76)
	その他	5.52 (5.75)	微笑み	2.32 (3.20)

注. 情動強度とは、各観察単位で評定された快情動と不快情動それぞれの値を合計して観察単位数で割った値である。また、行動の生起頻度とは、場面全般にわたって各行動が生起した単位数である。

Table 5 子どもの情動強度や子どもと母親の行動頻度と子どもの月齢の相関係数

	子どもの情動 および行動	月齢との 相関	母親の行動	月齢との 相関
情動	快情動	-.33		
	不快情動	.40 *		
対象への注 意維持	対象への焦点化 (受動的)	-.13	単純な説得	.16
	対象への焦点化 (能動的)	.14	洗練された説得	.12
	対象への焦点化 (言語随伴的)	.40 *		
対象からの 注意解放	気晴らし (受動的)	-.38 *	注意切り替え (母親始発)	-.11
	気晴らし (能動的)	-.35	注意切り替え (子ども始発)	-.10
慰撫	母親への慰撫要求	.20	身体的慰撫 (子ども始発)	.19
	自己慰撫	-.06	身体的慰撫 (母親始発)	.27
			受容	.19
その他	母親への攻撃的行動	.55 **	消極的な関わり	-
	その他	-.02	微笑み	-.02

* $p < .05$, ** $p < .01$

結 果

まず、母子の葛藤的やりとり3分間における子ども快・不快情動の強度や各制御行動の頻度の被験者間平均、および母親による制御行動の生起頻度の被験者間平均を Table 4 に示す。

子どもの情動・制御行動および母親の制御行動と子どもの月齢の関係

子どもの快・不快情動の強度や制御行動の頻度と子どもの月齢との間の単純相関係数 (Figure 1 の①に対応) を Table 5 に示す。また、母親の制御行動の頻度と子どもの月齢との間の相関係数 (Figure 1 の②に対応) も Table 5 に示す。母親の制御行動は子どもの月齢との有意な相関は見られなかった。しかし、子どもの情動や制御行動の幾つかは月齢との有意な相関が見られた。特に有意な相関に関して述べれば、月齢の高い子どもほど葛藤的やりとりでの不快情動の強度が強く、言語随伴的な対象への焦点化や母親への攻撃行動を示しやすいが、受動的な気晴らしを見せない、という結果が示された。母親の制御行動の頻度が子どもの月齢に応じて変化する可能性が見込まれたが、本調査ではそうした結果は得られなかった。一方で、子どもの情動や制御行動は特に月齢が高

くなるにつれて、言語を駆使したり不快感や攻撃性を示したりする傾向が高まっていくことが示唆された。

子どもの情動と子どもおよび母親の制御行動との関係

続いて、子どもの快・不快情動と子ども自身の制御行動の単純相関係数 (Figure 1 の③に対応) および母親の制御行動との単純相関係数 (Figure 1 の④に対応) を Table 6 に示す。特に有意な相関結果について述べれば、まず、子ども側に関して、能動的なまたは言語随伴的な対象への焦点化を多く示す子どもほど不快情動を強く示し快情動をあまり示さないこと、また母親への慰撫要求を多く示す子どもほど不快情動を強く示し快情動をあまり示さないこと、一方、評定不可能なその他の行動を示す子どもほど快情動を強く示し不快情動をあまり示さないことが示された。他方で、母親側に関しては、有意な相関は殆ど見られなかったが、快情動を強く示す子どもの母親ほど自発的に子どもに身体的慰撫を施さないことが示された。こうしてみると、子ども側に関しては、その不快情動に対象への希求や母親への慰撫希求が連動しているように思われる。しかし、母親の制

Table 6 子どもの情動と子どもや母親の行動頻度の相関係数

子どもの行動		不快	快	母親の行動	不快	快
対象への 注意維持	対象への焦点化 (受動的)	.01	-.14	単純な説得	.14	-.10
	対象への焦点化 (能動的)	.55 **	-.55 **	洗練された説得	.09	-.04
	対象への焦点化 (言語随伴的)	.66 **	-.53 **			
対象からの 注意解放	気晴らし (受動的)	-.16	.26	注意切り替え (母親始発)	.14	-.21
	気晴らし (能動的)	-.17	.05	注意切り替え (子ども始発)	.26	.26
慰撫	母親への慰撫要求	.42 *	-.43 *	身体的慰撫 (子ども始発)	.24	-.29
	自己慰撫	-.19	.25	身体的慰撫 (母親始発)	.32	-.42 *
				受容	.28	-.23
その他	母親への攻撃行動	.26	-.19	消極的な関わり	-.14	.32
	その他	-.54 **	.59 **	微笑み	-.05	-.10

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 7 子どもの情動・行動と気質の偏相関 (子どもの月齢を統制)

子どもの情動および行動		活動性	快情動 表出	興味/固執	恐れやすさ	怒りやすさ
情動	快情動	.23	-.04	-.02	.40	.19
	不快情動	-.17	.07	.03	-.33	.03
対象への 注意維持	対象への焦点化 (受動的)	-.08	-.07	-.33	-.01	-.22
	対象への焦点化 (能動的)	-.09	.00	.18	-.44 *	-.35
	対象への焦点化 (言語随伴的)	-.16	.03	.06	-.28	-.02
対象からの 注意解放	気晴らし (受動的)	-.11	.20	.30	.34	.37
	気晴らし (能動的)	-.23	.26	-.11	-.31	-.07
慰撫	母親への慰撫要求	-.02	.07	-.09	.08	-.02
	自己慰撫	-.55 **	-.53 **	-.19	.28	-.11
その他	母親への攻撃行動	-.02	.09	-.12	.01	-.29
	その他	.44	-.05	-.27	.15	.15

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 8 母親の行動と性格特性の偏相関 (子どもの月齢と快・不快強度を統制)

母親の行動		外向性	情緒不安定性	開放性	協調性	誠実性
対象への注意維持	単純な説得	.10	-.32	.12	.22	.18
	洗練された説得	-.17	.21	-.07	-.71 **	-.14
対象からの注意解放	注意切り替え (母親始発)	-.04	.35	-.27	.05	.09
	注意切り替え (子ども始発)	.50 *	-.31	.36	.12	-.35
慰撫	身体的慰撫 (子ども始発)	.02	.09	.08	.13	-.14
	身体的慰撫 (母親始発)	.00	.06	-.08	.13	-.14
	受容	-.06	-.01	.16	.11	.06
その他	消極的な関わり	-.25	.15	-.12	.06	-.13
	微笑み	.21	-.20	.05	.09	-.20

* $p < .05$, ** $p < .01$

御行動は必ずしも子どもの不快あるいは快情動に連動して変化するというわけではないようであり、むしろ、母親の過去の子どものやりとり経験やパーソナリティが影響している可能性があるかもしれない。

子どもの情動・制御行動と気質の関係

子ども自身の気質が情動表出や制御行動を大きく左右している可能性を検討するために、それらに多く関与する子どもの月齢を統制した、子どもの情動・制御行動と気質の偏相関係数 (Figure 1 の⑤に対応) を Table 7 に示す。その結果、幾つかの有意な相関が見られた。まず、気質的に恐れやすい子どもは能動的に対象への焦点化を示さない傾向にあること、また気質的に活動性が高く快情動を表出しやすい子どもは自己慰撫行動を示さない傾向にあることが示された。しかし特に、気質と葛藤のやりとりにおける快・不快情動との関連は示されなかった。

母親の制御行動とパーソナリティの関係

最後に、母親の制御行動がパーソナリティ特性の影響を受けているかを検討するために、母親の制御行動とパーソナリティ特性の偏相関係数 (Figure 1 の⑥に対応) を Table 8 に示す。なお、母親の制御行動が子どもの月齢や情動の影響を受

けていることを想定して、それらを統制変数として偏相関係数を算出している。幾つかの有意な相関結果に関して述べると、協調性の強い母親ほど洗練された説得をしないこと、また外向性の強い母親ほど子どもの行動を契機にして子どもの注意を切り替える行動を多く示すことが見出された。

考 察

子どもの情動や制御行動の発達的变化

本調査では1歳から2歳半までの子どもを対象としているが、月齢の高い子どもほど母子の葛藤的やりとりの中で、不快情動を強く表出したり母親に攻撃的行動を示したりしやすく、また言語を駆使して片づけられた玩具に求めようとするものが示された。この時期には養育者と子どもの間の葛藤が顕著になり、養育者への反抗や自己主張が増大することが多くの研究で示されているが、本調査でも明らかであった。また、この時期には言語発達も顕著になり、それに相応して対象希求においても言語の使用が増大していくものと思われる。

しかし、こうした子どもの情動反応や情動制御方略は単に月齢に比例するものではなく、実質的にはある特定の認知・言語発達が絡んで発達して

いくものであろう。Bridges et al. (2004) が指摘しているように、情動制御発達を詳らかに把握するために、ある特定の情動制御レパートリーの発生・存続・消滅に身体発達や認知発達がいかに関与するかを検討していく必要があるだろう。

子どもの加齢に伴う母親の制御行動の変化

本調査では、母親の特定の制御行動が子どもの月齢の増大に応じて減少したり増大したりする、という結果をみることはできなかった。母親やその子どもの個人的な特性とは別に、母親の制御行動に関してそうした変化の一定のパターンを見出すことはできなかった。本調査の分析で用いた行動コードは母親の制御行動を細分化したきらいがあり、もう少し集約した行動コードで評定すれば、子どもの月齢の増大に応じた一定の変化が見られたかもしれない。また、現実的に、母親は子どもの発達状況や気質などの特性、また子どもが獲得した行動ややりとりのパターンを理解した上で、子どもの情動を調整しようとするものであり、そのことからすれば、母親の制御行動の変化は単に子どもの月齢ではなく子どもの認知・言語発達に依拠するものであろう。母親の制御行動や養育方略の変化に関して、そうした観点での検討が今後望まれる。

母子の葛藤的やりとりにおける子どもの情動と制御行動の関係

能動的または言語付随的に対象への焦点化を示しやすい子どもや母親への慰撫要求を示しやすい子どもは不快情動を強く表出し、一方快情動をあまり示さない傾向にあることが分かった。不快情動と対象への焦点化や母親への慰撫要求は連動して生じているようであり、快情動はそうした行動を示しているときには生じにくいようである。

しかし、不快情動と対象への焦点化や母親への慰撫要求の因果関係はいかなるものなのであろうか。また、快情動はこうした葛藤的やりとりの中でいかなる役割を果たすのであろうか。こうした点までを本調査の分析結果は示唆しない。久崎(2008)では、この3分間の葛藤的やりとりにおける子どもの制御行動による不快情動の制御効果を検討しているが、その中で能動的な対象への焦点化は不快情動を持続させる効果があることを実証している。ただ、3分間の葛藤的やりとりの分

析は、制御効果や因果関係を検討するうえで短かったと思われる。多くのこれまでの研究も養育者や子どもへの負担を考慮して短めにやりとりを設定しているが、もう少し長く展開されるやりとりの中でしばらくして制御効果をなしうる子どもの行動が現れる場合もあるだろう。両者に負担をかけないような工夫が可能になれば、より長い時間のやりとりに対する観察や評定が重要な知見を呈するかもしれない。

母子の葛藤的やりとりにおける子どもの情動と母親の制御行動の関係

子どもの情動と母親の制御行動の関係について特に大きな結果は得られなかったが、快情動をあまり表出しない子どもの母親は自ら子どもに対して身体的慰撫を施す傾向があることが分かった。一方、子どもの不快情動の強さは母親始発の身体的慰撫とは正の相関であっても有意なものではなかった。こうした子どもの情動の正負によって異なる結果は基本的に、サンプル数の少なさにも原因があるだろう。しかし、それ以外の説明を求めるとすれば、母親の制御行動や養育行動のモチベーションというところにも在るかもしれない。すなわち、上記の母親の身体的慰撫の結果に連ねて言えば、母親は単に子どもの不快情動を静穏化しようというモチベーションだけでなく、子どもの快情動を引き出そうというモチベーションもあって身体接触を通じた慰撫行動をとるのかもしれない。当然ながら、こうした母親の心的な動きを本調査の観察から読み取ることはできないが、養育者の行動に及ぼしうる快情動の特有の機能がそこにあるのかもしれない。

子ども自身の気質が母子の葛藤的やりとりに及ぼす影響

気質的に活動性が高く快情動を表出しやすい子どもほど葛藤的やりとりの中で自己慰撫をしない傾向にあることが見出された。自己慰撫は自分自身の身体の一部を持続的に触ることであるが、そうした行動は子どもの社会的場面の中では困惑したり恥ずかしい思いをしたりしたときによく見られる行動であろう。一方、活動性や快情動に伴う表出や行動は決して自己志向的なものではないだろう。上記のような関連が見出されても可笑しくはない。また、気質的に恐れやすい子どもほど葛

藤場面で対象を能動的に希求しようとしないうちも見出された。すなわち、気質的に抑制的な子どもは葛藤的やりとりにおいても対象への希求に対して抑制的になることが示唆される。

これらの結果は、気質的な特徴と制御行動の性質が概ね合致するような結果であり、解釈の観点からしても妥当の結果と言えるだろう。また、活動性や快情動の表出しやすさといった正の情動性(positive emotionality)よりも恐れやすさといった負の情動性(negative emotionality)は子どもの制御行動に抑制的にはたらき、適切な制御行動の発達を阻害する可能性があり、負の情動性を有した子どもには養育者や大人による情動制御や適切なガイドが重要なかもしれない。

母親のパーソナリティ特性が母子の葛藤的やりとりに及ぼす影響

まず、協調性の強い母親ほど洗練された説得をしない傾向にあることが見出された。Magai, Distel, & Liker (1995)によれば、Big Five 5因子はそれぞれ特定の情動バイアスと関係があり、協調性は怒りの制御・抑制しやすさと関係があるという。あまりにも協調性が高いと、子どもの心情に注意が向き過ぎて怒りに乗せて主張したり嫉妬したりしないということを反映しているのかもしれない。また、外向性の強い母親ほど子どもの行動を契機にして子どもの注意を切り替える行動を多く示しやすいことも示された。外向性は喜びという情動の経験・表出しやすさと関係があるという(Magai et al., 1995)が、外向性の高い母親はこのような葛藤的やりとりの中でも子どもの行動を契機にして楽しいやりとりに移行させようとする傾向があるのかもしれない。こうしてみると、母親のパーソナリティ特性はその行動に幾分関与しており、情動制御における養育者の働きかけやそのパターンをみる上で養育者自身のパーソナリティを度外視することはできないであろう。

今後の課題

本研究は、玩具が奪われることを契機とした母子間の葛藤的やりとりにおける子どもや母親の制御行動がいかなる要因と関係しているかを検討するものであった。特に情動制御発達に対する養育環境の影響について体系的な理解を得ようとする調査・検討であったが、それぞれの結果が繋がり

をもって体系化されたものではなく、むしろ個々バラバラに示されたものであった。その原因はひとえに、体系的な検討の対象が時間的に安定した子どもの気質、それを部分的に反映している一過的な子どもの情動反応や制御行動、子どもの一過的な反応・行動に幾分随伴した母親の制御行動、その母親の制御行動に部分的に関わるパーソナリティ特性と、時間的にも構造的にも大きな広がりをもっており、時間や空間構造を超えて個々を整合的に結びつけるような方法論や統計的手法を筆者が持ち合わせていないという非力さに在るのだろう。

例えば、金丸・無藤(2004)のように葛藤的やりとりにおける子どもの情動制御パターンを類型化すれば、各パターンで子どもや母親がいかなる制御行動をもって不快情動を静穏化しているか、また、各パターンに関与する子どもの気質や養育者の特質がいかなるものかを見出すことができたであろう。また、時間的に安定した要因を説明変数、一過的に観察される行動パターンを従属変数として時間的な因果を考慮した縦断的な調査を行えば、気質や養育者のパーソナリティ特性の予測的影響やトランザクショナルな関係を示すことができたかもしれない。

しかし、こうした情動制御発達の体系的研究への挑戦はまず、いかなる子どもや母親の行動が不快情動を実質的に制御しうるのか、また不快情動だけでなく快情動が葛藤的やりとりにいかなる作用をなすのかという問題に一貫した結果を得るようになって、意味をもってくるように思われる。なぜなら、特定の情動制御パターンは基本的に、その時その場であるいは予期的にその主体にとって有意義なものが大よそ獲得・維持されるに違いないからである。唐突であるが、本研究の対象となったある母子間の葛藤的やりとりに関して母親が玩具を片づけると、子どもはしきりに玩具の片づけられたところに向かって手を伸ばし、怒りを込めて執拗に母親に玩具を取るよう要求していた。しかし、母親は子どもの顔を何度か見つつも、(意図的かどうかは分からないが)別のこと(雑誌を片づけたり、部屋を簡単に掃除したりするなど)に注意を向けて、子どもの

その執拗な要求にあまりかまうことはなかった。そうした母子のすれ違い的なやりとりが続く中で、子どもは執拗さを治めて母親に抱っこを要求するようになっていった。この一連の母子間のやりとりは、葛藤という文脈においてどの程度頻発しているのであろうか。また、葛藤以外の文脈ではどのようなやりとりのパターンが形成されているのであろうか。さらには、この時点で見られた子どもの行動パターンの変化やその繰り返しは、その後の、母子間の葛藤や欲求不満事態といった不快情動の制御を要する状況での子どもの制御行動に実際影響を及ぼしているのであろうか。たった1組の一時点の母子の葛藤的やりとりでも、そこに因果的な発達過程という目を通して観るだけで上記のような様々な問いが生まれてくる。こうした問いに答えるために、決して多サンプルの統計的処理による有意性でもって物語る必要はないのではないだろうか。むしろ1組の母子のやりとりを時系列的に追って何度も観察していく中で、やりとりのパターンや因果的な影響を見出すことも有効だと思われる。ただ、その具体的方法を筆者はまだ知らない。

以上のように、二者間制御から一者の自律的制御へ移行する歩行開始期の情動制御発達研究においては、その移行がどのような形で実際に立ち現れるのかを明確に示すことができるという意味で、今後、統計的有意性に頼った量的研究だけでなく時系列的記述に重きを置く質的研究をも重視していくべきなのであろう。そして、制御の主体が子どもであれ養育者であれ、Bridges et al. (2004) が指摘するところの、いかなる行動が制御効果をもたらすか（あるいは持たないか）、ある種の制御行動は情動に対して長期的な制御効果をなすのか、情動制御レパトリーの変化はそのレパトリー内の制御行動それぞれの相対的な効果の影響をどの程度受けるか、という問題を解明することがまず先決の課題であることは確かである。

文 献

Averill, J. R. (1982). *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: Springer-Verlag.
 Bridges, L. J., Denham, S. A., & Ganiban, J. M. (2004). Definitional issues in emotion regulation

research. *Child Development*, 75, 340–345.
 Brownell, C. A., & Kopp, C. B. (2007). Transitions in toddler socioemotional development: Behavior, understanding, relationships. In C. A. Brownell & C. B. Kopp (Eds.), *Socioemotional development in the toddler years: Transitions and transformations*. New York: Guilford. Pp. 1–40.
 Buss, K. A., & Goldsmith, H. H. (1998). Fear and anger regulation in infancy: Effects on the temporal dynamics of affective expression. *Child Development*, 69, 359–374.
 Calkins, S. D., & Johnson, M. C. (1998). Toddler regulation of distress to frustrating events: Temperamental and maternal correlates. *Infant Behavior & Development*, 21, 379–395.
 Calkins, S. D., & Hill, A. (2007). Caregiver influences on emerging emotion regulation: Biological and environmental transactions in early development. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford. Pp. 229–248.
 Campos, J. J., Campos, R. G., & Barrett, K. C. (1989). Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25, 394–402.
 Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004). Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75, 317–333.
 Cosmides, L., & Tooby, J. (2000). Evolutionary psychology and the emotions. In M. Lewis, & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions*. New York: Guilford. Pp. 91–115.
 Diener, M. L., & Mangelsdorf, S. C. (1999). Behavioral strategies for emotion regulation in toddlers: Associations with maternal involvement and emotional expressions. *Infant behavior & Development*, 22, 569–583.
 Diener, M. L., Mangelsdorf, S., McHale, J., & Frosch, C. (2002). Infants' behavioral strategies for emotion regulation with fathers and mothers: Associations with emotional expressions and attachment quality. *Infancy*, 3, 153–174.
 Easterbrooks, A., & Emde, R. N. (1983). Hedonic Tone Scale. Unpublished manuscript.
 Eisenberg, N., & Spinrad, T. L. (2004). Emotion-related regulation: Sharpening the definition. *Child Development*, 75, 334–339.
 遠藤利彦 (2007). 情動は人間関係の発達にどうかか

- わるのか—オーガナイザーとしての情動, そして情動的知性 須田 治 (編) シリーズ 子どもへの発達支援のエッセン第2巻 情動的な人間関係の問題への対応 金子書房 Pp. 3-33.
- Evans, D. (2001). *Emotion: The science of sentiment*. New York: Oxford University Press. (遠藤利彦 (訳) (2005). 一冊でわかる感情 岩波書店)
- Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E. L., & Target, M. (2002). *Affect regulation, mentalization, and the development of the self*. New York: Other Press.
- Gergely, G., & Watson, J. S. (1999). Early social-emotional development: Contingency perception and the social biofeedback model. In P. Rochat (Ed.), *Early social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp. 101-136.
- Gilliom, M., Shaw, D. S., Beck, J. E., Schonberg, M. A., and Lukon, J. L. (2002). Anger regulation in Disadvantaged preschool boys: Strategies, antecedents, and the development of self-control. *Developmental Psychology*, 38, 222-235.
- Goldsmith, H. H. (1992). *The toddler behavior assessment questionnaire*. A preliminary manual.
- Goldsmith, H. H. (1996). Studying temperament via construction of the toddler behavior assessment questionnaire. *Child Development*, 67, 218-235.
- Gralinski, J. H., & Kopp, C. B. (1993). Everyday rules for behavior: Mothers' requests to young children. *Developmental Psychology*, 29, 573-584.
- Grolnick, W. S., Bridges, L. J., & Connell, J. P. (1996). Emotion regulation in two-year-olds: Strategies and emotional expression in four contexts. *Child Development*, 67, 928-941.
- Grolnick, W. S., Kurowski, C. O., & McMenamy, J. M. (1999). Emotional self-regulation in infancy and toddlerhood. In L. Balter & C. S. Tamis-LeMonda (Eds.), *Child psychology: A handbook of contemporary issues*. New York: Psychology Press. Pp. 3-22.
- Grolnick, W. S., Kurowski, C. O., McMenamy, J. M., Rivkin, I., & Bridges, L. J. (1998). Mothers' strategies for regulating their toddlers' distress. *Infant Behavior & Development*, 21, 437-450.
- Gross, J. J., & Thompson, R. A. (2007). Emotion regulation: Conceptual foundations. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation*. New York: Guilford. Pp. 3-24.
- 久崎孝浩 (2008). 生後2, 3年目の子どもの情動や行動に対する子ども自身や母親による制御の効果 九州ルーテル学院大学 発達心理臨床センター紀要, 7, 13-28.
- Izard, C. E., & Malatesta, C. Z. (1987). Perspectives on emotional development: I. Differential emotions theory of early emotional development. In J. D. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development (2nd ed.)*. New York: Wiley. Pp. 494-554.
- 金丸智美・無藤 隆 (2004). 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差 発達心理学研究, 15, 183-194.
- Keltner, D., & Haidt, J. (2001). Social functions of emotions. In J. Mayne & G. A. Bonanno (Eds.), *Emotions: Current issues and future directions*. New York: Guilford. Pp. 192-213.
- Kopp, C. B. (1989). Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. *Developmental Psychology*, 25, 343-354.
- Kuczynski, L., & Kochanska, G. (1990). Development of children's noncompliance strategies from toddlerhood to age 5. *Developmental Psychology*, 26, 398-408.
- Kusanagi, E., Hoshi, N., & Chen, S. (1997). An examination of psychometric properties and validity of the toddler behavior assessment questionnaire. *Research and Clinical Center for Child Development Annual Report*, 19, 33-43.
- Magai, C., Distel, N., & Liker, R. (1995). Emotion socialization, attachment, and patterns of adult emotional traits. *Cognition and Emotion*, 9, 461-481.
- Mangelsdorf, S. C., Shapiro, J. R., & Marzolf, D. (1995). Developmental and temperamental differences in emotional regulation in infancy. *Child Development*, 66, 1817-1828.
- Meltzoff, A. N. (1995). Understanding the intentions of others: Re-enactment of intended acts by 18-month-old children. *Developmental Psychology*, 31, 838-850.
- Meltzoff, A. N., Gopnik, A., & Repacholi, B. M. (1999). Toddlers' understanding of intentions, desires, and emotions: Explorations of the dark ages. In P. D. Zelazo, J. W. Astington, & D. R. Olson (Eds.), *Developing theories of intention: Social understanding and self-control*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp. 17-41.
- Nachmias, M., Gunner, M., Mangelsdorf, S., Parritz, R. H., & Buss, K. (1996). Behavioral inhibition and stress reactivity: The moderating role of attachment security. *Child Development*, 67, 508-522.
- Repacholi, B. M., & Gopnik, A. (1997). Early

reasoning about desires: Evidence from 14- and 18-month-olds. *Developmental Psychology*, 33, 12–21.

- Repacholi, B. M., & Meltzoff, A. N. (2007). Emotional Eavesdropping: Infants Selectively Respond to Indirect Emotional Signals. *Child Development*, 78, 503–521.
- Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (2006). Temperament in children's development. In W. Damon (Edition-in-Chief), R. M. Lerner (Edition-in-Chief), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development (6th ed.)*. New York: Wiley. Pp. 99–166.
- Saarni, C. (1999). *The development of emotional competence*. New York: The Guilford.
- Saarni, C., Campos, J. J., Camras, L. A., & Witherington, D. (2006). Emotional Development: Action, communication, and understanding. In W. Damon (Edition-in-Chief), R. M. Lerner (Edition-in-Chief), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development (6th ed.)*. New York: Wiley. Pp. 226–299.
- 坂上裕子 (1999). 歩行開始期における情動制御：問題解決場面における対処行動の発達 発達心理学研究, 10, 99–109.
- 坂上裕子 (2010). 歩行開始期における自律性と情動の発達—怒りならびに罪悪感, 恥を中心に—心理学評論, 53, 38–55.
- Spinrad, T., Stifter, C., Donelan-McCall, N., & Turner, L. (2004). Mothers' regulation strategies in response to toddlers' affect: Links to later emotion self-regulation. *Social Development*, 13, 40–55.
- Sroufe, A. (1996). *Emotional development. The organization of emotional life in the early years*. New York: Cambridge University Press.
- Thompson, R. A. (1990). Emotion and self-regulation. In R. A. Thompson (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation, 1988: Socioemotional development*. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 367–467.
- 氏家達夫 (2010). 発達研究が捉える感情は生ぬるくなってしまうのか？—久保氏, 森野氏, 坂上氏の論文に対するコメント— 心理学評論, 53, 56–61.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61–67.
- Watson, J. S. (1994). Detection of self: The perfect

algorithm. In S. T. Parker, R. W. Mitchell, and M. L. Boccia (Eds.), *Self-awareness in animals and humans: Developmental perspectives*. New York: Cambridge University Press. Pp. 131–148.

脚 注

- 1 Fonagy et al. (2002) は, Gergely & Watson (1999) の考えに依拠して, 子どもの不快の情動状態や表出が養育者による情動的映し出しによっていかに減じていくか, そのメカニズムを説明している。Gergely & Watson (1999) によれば, 子どもは生まれながらにして, 自己の身体反応に対するある刺激の時間的随伴性, 感覚強度の随伴性, 空間的随伴性を分析する随伴性探知モジュール (contingency detection module) を備えており, 前方視的に自己身体反応に対してその刺激がどの程度生起するかの確率 (十分条件確率: sufficiency index) と, 後方視的にその刺激の生起に対して自己身体反応がどの程度随伴していたかの確率 (必要条件確率: necessity index) を分析するという。そして, ある自己身体反応に対して刺激がいつも生起するわけではないが, 刺激の生起に対してその自己身体反応が常時後続的に随伴していたならば, つまり十分条件確率が必要条件確率より小さいならば, その刺激への自己効力 (self efficacy) を高めるために, その自己身体反応を減じることによって随伴性を最大化させる (反対に必要条件確率が十分条件確率より小さいならば, 自己身体反応を増大させることで随伴性を最大化させる) という。Fonagy et al. (2002) は, 養育者による適度な情動的映し出しに対してこうした子どもの潜在的なコンピテンスがはたらくことで, 子どもの情動状態・表出は調整されていくというのである。具体的には次のとおりである。子どもの情動的調子に適度に合わせることでできる共感的な養育者ならば, 子どもとの連鎖的なやりとりの中で, 子どもが不快な情動を特に強く表出されたときのみ情動的映し出しを行う傾向を有し, 子どもの不快な情動状態を常時監視したり頻回に映し出したりすることはないであろう。そのような場合, 子どもは後方視的にみて養育者の映し出しに対して自己自身の不快な情

動状態・表出がほぼ常に関与していること（高い必要条件確率）を、また前方視的にみて自己の不快な情動状態の後に養育者の映し出しが必ずしも生起しないこと（低い十分条件確率）を感知するであろう。そして、養育者の映し出しに対する自己効力を高めるために随伴性を最大化させようと、子どもは自己自身の不快な情動状態・表出を減退させていくであろう。

なお、乳幼児期の自閉症児によく見られる、思い通りにならないときの情動的混乱が養育者や大人の適度な対応でも中々静穏化しないこと（伊藤, 2009）には、自閉症児特有の随伴性探知が関わっているのかもしれない。Watson (Gergely & Watson, 1999; Watson, 1994) によれば、自閉症児では生後3ヶ月頃まで機能している完全な随伴性 (perfect contingency) を探知するモジュールがそれ以降、さほど完全ではない随伴性をも探知できる機能を有するまでに発達しないと、自閉症児はその後の発達過程でも自己身体反応に対する完全な随伴性の探知に

意を注ぎ込むという。そうした完全な随伴性の探知が自閉症児の中核的な障害であり、それゆえに自閉症児は常同的・周期的行動、決まりきった手順の変化への耐性のなさ、実行機能障害に関連する習慣的反応の抑制の難しさを呈し、一方で、完全な随伴性をみることのない社会的対象や社会的シグナルに対して忌避的であったり感受性が低かったりするのだという。先で述べたメカニズムからして、養育者が自閉症児の不快情動を宥めようとしてやりとりの中で断続的にその情動を映し出したりその他の対応を試みたりしても、完全な随伴性を追い求める自閉症児からすれば、その断続性は自己自身の不快情動を沈静させることへの自己効力に繋がらないかもしれない。もしそうだとすれば、自閉症児の時折の情動的混乱や日頃の情動反応に対して、その文脈に適した、極力迅速かつ随伴的な対応が求められるのかもしれない。

(2011. 2. 22 受稿, 2011. 3. 25 受理)

The relation of temperaments and parental personality traits to emotion regulation patterns in toddlers

Takahiro HISAZAKI

This research examined how children's temperaments and their mothers' personality traits were associated with emotions and behaviors they expressed and strategies that their mothers used during mother-child conflict. Twenty eight pairs of 13- to 30 month-old children and their mothers participated in the conflict situation where toys with which children had been playing were removed by their mothers. Mothers reported their own personality traits and temperaments of their children by questionnaire. As a result, in that conflict situation, temperamentally active and pleasurable children tended not to self-soothe and temperamentally fearful children were likely not to seek desired objects. More extroverted mothers inclined to distract their own child through playing with him/her and more cooperative mothers tended not to persuade him/her smartly. These results suggested that a longitudinal study which could elucidate the complex and systematic pathways that environmental and temperamental factors influence the development of emotion-regulating behavior pattern was needed for the future.

Key words: emotion regulation, toddlerhood, mother-child conflict, temperament, parental personality